



常磐橋 東京都千代田区 修復事業 無事に完了



架設当時の美しい姿を取り戻した常磐橋。対岸は日本銀行本店

写真提供：文化財保存計画協会、撮影：日暮雄一

河川に架かる石橋として都内最古の常磐橋（東京都千代田区）は、国指定史跡「常盤橋門跡」内の歴史的建造物。2011年の東日本大震災の揺れで輪石の一部が突出、アーチが歪むなど崩落の危険性があつたため、千代田区により修復事業が行われてきた。被災状況の調査を経て12年12月から石橋の解体、15年6月から復旧工事が行われた。橋の上空を首都高速道路がふさいでいるため大型クレーンが使えないなど工事にはさまざまな困難があつたようだが、9年近くをかけた修復は無事に完了。本年5月10日に橋の供用が始まった。

常磐橋の架設は1877（明治10）年。かつての江戸城大手門に続く常盤橋門前の外堀（現・日本橋川）に架かつていた木橋が石橋に架け替えられた。使用された石材の多くは、岡山藩主・池田光政らによって築かれた江戸城の小石川門の石垣の転用材であることが解体調査により判明している。

千代田区の広報誌によると、工事に当たっては①損壊箇所の修復②将来の災害へ備えた補強③架設当時の姿への復元④照明設備などの整備の4つを事業の柱とし、機能性や安全性の向上だけでなく、

古写真などを基にして文化財としての価値を保全しながら架設当時の姿への復元に取り組んだという。

常磐橋は、石材同士の間接合に凝固剤などを使わない空積（からづみ）工法であるが、輪石に転用された石材は控え（奥行き）が十分でないなど弱点を抱えた構造であつたため、修復工事では将来的な修理を見据えて石材の取り外しができるよう各石材の表面にゲル状の和紙を吹き付けて石材同士を縁切りし、超高強度モルタルを不連続に間詰めして不ぞろいな輪石の形状を補完する手法が開発された。

また、江戸湾沿岸などの石垣整備で多用された軟弱地盤での基礎構築技法も伝統技法で補強された。

橋の東岸には石積みレンガ造りの日本銀行本店があり、西岸は関東大震災後の常磐橋修復に尽力した渋沢栄一の銅像が立つ公園がある。明治維新後の文明開化期に架設された常磐橋は、首都・東京の歩みとともに明治・大正・昭和・平成を経て令和の時代に入り、2つのアーチが連なる美しい姿を再び川面に映している。（広報部）

参考資料／「広報千代田 令和3年4月号」千代田区発行、2021年4月27日千代田区プレスリリース、「橋梁と基礎2021年6月号」建設図書発行

中面の案内

2面 福岡県嘉麻市のリブアーチ型石橋
5面 「中国の古橋」撮影記その6（神晃弘）

3面 石橋ファン ネットで交流
7面 「I♡めがね橋」（上塚尚孝）

高校生の部活動 地域が注目

会報97号で伝えた、福岡県嘉麻市桑野の遠賀川源流域近くに架かるリブアーチ型石橋についての続報がある。福岡県立朝倉高等学校の中原透也さん(当時2年生)らが史学部部活動として進めた石橋調査の結果は昨年10月、新型コロナウイルス感染症防止の観点から入場者が制限される中、朝倉市で発表会が行われ、新聞などでその内容が報じられた。12月には嘉麻市で地元関係者向けに「桑野区掛橋に架かる石橋について」と題した講演会が行われ、史学部顧問の泉信至教諭が登壇。するとその後、市議会の一般質問でこの石橋の保存に関する質問がなされた結果、市の2021年度予算に石橋調査費用が計上されることとなった。

泉教諭は「コロナ禍により長く部活動ができなくなっていました。石橋保存活動については嘉麻市の区長や市文化財課の方と連絡を取っています。すでに専門家による石橋の調査が行われたようで、10月ごろにその結果が市へ報告される予定だと聞いています」と現状を説明。今後については「せっかく生まれた石橋への関心の維持が大事になるので、石橋保存に向け、関心を一時的なものに終わらせないよう、できることに粘り強く取り組んでいきたいと思っています」とコメントした。(広報部)

貴重なリブアーチ型石橋 保存を



上流側から撮影したリブアーチの梯(掛橋)。左側が嘉麻地域、右側が小石原地域方面



アーチの真下からは5列のリブアーチであることがよく分かる



路面は土で固められ、アーチ基底部(奥)の岩盤には石柱が立っている

写真は福岡県立朝倉高等学校ホームページより <https://asakura.fku.ed.jp/html/club/historicalsience.html> 「朝倉高校史学部」でネット検索を

近隣住民も知らない幻の石橋

史学部では昨年10月の発表をまとめた動画「幻のRib arch年代特定と名称発見」を制作し、動画投稿サイト「ユーチューブ」で発信した。以下に桑野区掛橋に架かるリブアーチ型石橋の調査から架橋年代、名称の特定に関する動画の概要を紹介する。

S S S

調査を行った史学部の中原さんは、まず石橋周辺の民家を一軒ずつ訪ねたという。何軒訪ねても現在の国道橋「掛橋」の下やぶの中に石橋が架かっていることを知る人がいなかったのだが、地区最高齢の88歳の女性だけが「昔はよく往き来しよったよ。橋にはこけがはえとった」と話してくれた。石橋は嘉麻地域と小石原地域を行き来するための橋だったようだ。

文献調査では福岡県の地誌「福岡県地理全誌」を見たが、地区の欄には「土橋」と「板橋」しか記載されておらず、「石橋」の項目はなかったため調査は行き詰まった。中原さんは念のため「土橋」とは何か、調べてみた。すると「土橋とは木材や石材のすき間を埋めるために橋面に土砂をかけてならしたものとあった。それでピンとひらめくものを感じ、あらためて地誌を読み直したところ、石橋とほぼ同じ「長五間(約

9^び、幅八尺(2・4^び)」の土橋の表記を見つけた。もしかしたら、地誌を編さんした人が石橋を土橋と記載したのかもしれない。

地誌には次の文も表記されていた。「掛橋。掛橋ハ無柱ノ橋ナリ。向ノ岸二天然ノ石柱立テリ。高一丈餘。谷川深キ故、柱ヲ立ス。因テ梯ト云。石柱甚奇ナリ」

中原さんは右の文中の「向かいの岸に天然の石柱立てり。高(たか)一丈(いちじよう)餘(あまり)」の箇所の記事に注目した。高さ1丈は約3^びに当たる。石橋の下(小石原側)にあった石柱も同じ高さである(右端写真)。橋長と橋幅がほぼ同じで、さらに同じ高さの石柱の存在。石橋が地誌の土橋と一致するものであると確信した。それにより地誌が編さんされた1874(明治7)年にはすでに石橋が架かっていたと結論づけた。

また、「谷川深き故(ゆえ)、柱を立(り)つす。因(より)て梯(かけはし)と云(いう)」の箇所は、橋の名称について記された文であると考えた。

中原さんはこの橋は架設されてから147年以上が経過している貴重なリブアーチ型石橋で、名称は「梯」であると考えられると発表。石橋の価値を多くの人と共有し、保存に向けた動きにつなげていきたいと述べている。

末永暢雄・副会長(長崎県)のフェイスブック・ページ

九州の石橋スケッチ紀行

Q検索



石橋を訪ねる旅のお供に

今年2月からフェイスブックで九州の石橋のスケッチを発表しています。コロナ禍により他県への石橋取材が難しくなったため、それを機会に、これまで描きためたスケッチを公開することで、石橋を訪ねる人の旅のお供になればと考えたものです。

SNSでは長い文章がはばかられることもあり、専門的な架橋背景やデータなどは省略し、まち歩きの方にも気軽に読んでいただける説明文にとどめました。また、これから石橋を訪ねる方のためにテーマ——例えば滝と石橋など——を持たせています。(末永)

スマートフォン(スマホ)の保有世帯はすでに固定電話やパソコンを上回り※、ネットを活用した個人同士の情報交流が盛んになってきた。コロナ禍によつて人と人の接触回避や人流の抑制が求められるようになり、石橋ファンの間でも身近なデジタル技術を活用した新しい生活様式への転換が進んでいる。これまでもウェブサイト(ホームページ)で石橋情報を発信する動きがあったが、近年は会員制交流サイト(SNS)を活用する事例も出てきた。その中から、実名での会員登録が求められる「フェイスブック」を使って交流する3例を紹介する。(広報部)

※「令和2年度版情報通信白書 情報通信機器の保有状況」(総務省発行より)。2017年に世帯当たりのスマホ保有率がパソコン、固定電話を上回り、19年現在はスマホ83・4%、パソコン69・1%、固定電話69・0%の状況

石橋ファン ネットで交流

◇石橋ウェブサイトの検索キーワード

「石橋 眼鏡橋 太鼓橋」=賛田岳和会員
「宮様の石橋」=宮川康夫会員
「世界の石橋へ」=小沼敬一会員
「行ってみたい日本の橋 眼鏡橋」=定岡克実会員
「日本の石橋を守る会」=本会ホームページ



森川孝一理事(熊本県)のフェイスブック・ページ

石橋の魅力を伝える会

Q検索



石橋の魅力を語り合う場

「拱(きょう)」は両手を組む、腕を組むという意味で、英訳すると arch(アーチ)。「通潤橋」(山都町)のアーチの美しさに魅せられて石橋を巡り、そして、先人たちの知恵と技術の結晶である石造アーチ橋、桁橋を知り、それぞれの石橋が持つ知られざる魅力、謎などを多くの人と共有したくて昨年1月、「石橋の魅力伝える会」を作りました。

会員数も増えて石橋ファンの情報共有、発信の場となりました。全国の石橋が紹介されるようになり、会員はおおのの目線で意見を交換し合い、石橋の魅力について語り合っています。(森川)

ほたと石橋の館(福岡県)のフェイスブック・ページ

ほたと石橋の館

Q検索



石橋のある地域の魅力を発信

「ほたと石橋の館」は福岡県八女市上陽町を流れる清流、星野川に架かる寄口橋(2連石橋)に隣接する観光施設です。フェイスブックではホテルと石橋に関する情報はもちろん、イベントのお知らせや報告、特産品や季節限定のオリジナルカフェメニューなどを紹介しています。春の桜や夏の川遊びの写真など、四季折々の美しい風景に溶け込む石橋をアップするように心掛け、地域の魅力を発信しています。石橋ファンの皆さまにページをシェアしていただいたり、「いいね」やコメントをいただいたりすることが喜びと、励みになっています。(内田)

活動15年 地元の石橋を清掃

理事 上妻信寛（熊本県）

石橋の保護と景観の維持を目的に2006（平成18）年から地元の熊本県玉名郡和水町で石橋の清掃活動が続いている。町の文化財保護審議委員と社会教育課の10人ほどがメンバー。本年度は3月に久米野橋、蛇田（竈門）橋、東深倉橋、鬼丸眼鏡橋の4橋の清掃を実施した。地道な活動が石橋の文化財指定へとつながればと思っている。

かつては石橋を訪れる人から、現地に案内表示がないので石橋の場所が分からにくいとの声があった。そこで委員から標柱を立てる提案があり、7年前に設置を完了した。

5年前から社会教育課の若手3人が清掃活動に参加してくれるようになったことはありがたい。今後も活動を継続していきたい。



東深倉橋の清掃活動の様子＝2021年3月、和水町
写真提供／森川 孝一

立門橋＝熊本県菊池市

壁石の一部が崩落

熊本県菊池市の「立門橋」（たてかどばし、県指定文化財）の壁石の一部が崩落した。崩れたのは西岸（右岸）下流側の石垣がはね出した隅角部から西



左は2014年3月撮影（熊本地震の2年前）の立門橋で、写真中央の石垣部分にはらみ出しがみられる。右は2021年8月31日撮影。西岸下流側のはね出した石垣の隅角部から西側の10mほどが崩落した
写真提供／中村まさあき

側10mほど。気象庁発表の降水量は菊池で8月1日と2日の2日間で165.5mmの雨を観測。崩落は2日朝に確認された。その後11日からは激しい雨の日が続き18日までの8日間で計698mmの雨が降り損傷が広がった。

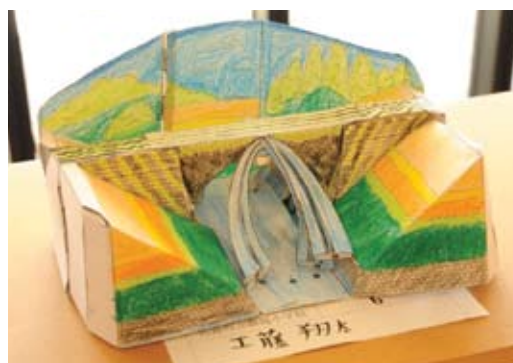
同橋は2016年の熊本地震で被災して東岸下流側取付護岸の石垣が崩れるなどして修復工事が行われたが、西岸石垣のはらみ出し箇所は対象外だったようだ。

橋は通潤橋（山都町）架設工事で石工棟梁を務めた宇市（橋本勘五郎の次兄）が幕末の1860年に架け、川をまたぐ単一アーチ橋と水路をまたぐ持送り式桁橋を組み合わせた構造で、橋長は36.6mある。

中村秀樹・調査研究部長は「詳しい調査が必要だが、経年変化と熊本地震の影響が考えられる。崩落したのは押さえ石垣が施されていない箇所ので、崩落した石材は胴（奥行き）が短いことから構造上の弱点もあった」とみている。

経年変化は災害復旧の対象にならないことが多いが、今回の崩落が石橋の災害復旧と維持管理の在り方を考え直す機会となることを期待したい。（広報部）

通潤橋のペーパークラフト



児童のペーパークラフト作品＝2021年8月、山都町役場
写真提供／中村まさあき

熊本県上益城郡山都町の小学生が作った「通潤橋」のペーパークラフト作品が7～8月のおよそ1カ月間、山都町の肥後銀行浜町支店と町役場に展示された。同銀行は今年の顧客配布用カレンダーに通潤橋を採用したが、その一方でペーパークラフトの型紙を作成してネットに公開。「コロナ禍の影響で自宅にこもる児童に対し浜町支店は、町内6小学校に呼び掛け、展示が実現した。

白い型紙に色鉛筆で思い思いの色を塗って各児童が組み立てた作品は、カラフルでユニークなものが多かった。子どもたちが楽しみながら文化財に親しむ機会となったこうした取り組みも、石橋を守る次世代の担い手づくりにつながるのではないだろうか。（広報部）

歴史の橋 大渡河のつり橋

目指したのは四川省の「瀘定橋（ろていきょう）」。「成都」から南西へ約250kmの瀘定県城西を流れる大渡河に架かるつり橋。周囲を高い山々に囲まれたチベット族の自治区でした。レンタカーで山道を走り続けること

「中国の古橋」撮影記 その6

神 晃弘（福岡県）



瀘定橋を渡るラマ僧＝中国・四川省瀘定県

写真提供／神 晃弘

か走れません。交通事故が起きると半日通行止めになることもあるようなので、祈る思いで峠を下りました。

無事に瀘定橋に到着すると、急流に架かる長大なつり橋を見上げて歴史に思いをはせました。この橋を中国の歴史上、一躍有名にしたのは1935年

の橋上の戦いです。橋を死守する蒋介石の国民党軍と、満州事変に直面して抗日を目指し、北上してきた毛沢東が率いる中国工農紅軍との間に激しい攻防が繰り広げられ、橋はついに毛沢東軍の手に落ちたのです。

瀘定橋は全長103.6m、幅2.9m。13本の鉄鎖からできていて、楕円形の鎖の輪の一つ一つに制作した人の印が入っています。万一鎖が切れて橋が崩れたらその製作者が探し出され、ムチ打ちならぬ200回の板打ち刑が待っていたといわれます。この有名な橋を一目見ようと若い観光客たちが訪れていました。対岸へ渡る際、人が増えるほど橋は揺れるので、緊張のあまり足下で岩に砕ける急流の音もよく聞こえてきました。

およそ6時間。耳がおかしくなり、頭痛もしてきたので見晴らしの良い峠で休憩。ガイドの時計の高度計を見ると3200mもあり、遠くに大渡河の流れが見えました。幹線道路と聞いていたのに道幅は狭く、大型車も走るので舗装が陥没していて時速40km前後でし

（次号に続く）

鴨籠橋＝熊本県宇城市

震災から5年を経て復旧

2016年の熊本地震から5年を経て、宇城市不知火町の「鴨籠橋（かもこぼし）」（市指定文化財）の解体復旧工事が今年5月に終わった。

同橋の創建時期ははっきりしないが明治期とみられており、その後1951（昭和26）年にほぼ同じ幅の石橋を隣に増築して路面の拡幅が行われた。長年の間に2橋の段差が拡大し、基礎石垣の目地が開き、壁石にはらみ出しがみられた。熊本地震の揺れにより輪石や路面などに亀裂が入って、創建時の石橋は崩落の危険性があつた。

アーチを支える支保工を設置して石橋の解体調査が行われ、損傷した石材は補修して使用された。亀裂が入った



復旧工事中の鴨籠橋。創建時の石橋の輪石にもほぞ穴が空いた転用材が使用されている



復旧した鴨籠橋

輪石などの補修には一般に耐水性や耐薬品性、付着性に優れた合成樹脂（エポキシ系）の補修剤が使用されるが、鴨籠橋では自然素材にこだわって石灰系補修剤も使用された。

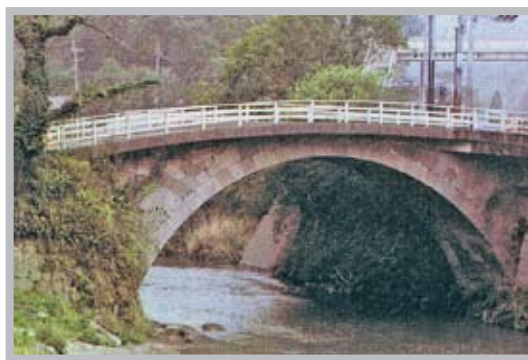
創建時の石橋を解体してみると、宇土市で産出するピンク色の馬門石と思われる石材が多用されていた。石材にはほぞ穴が空いているものが少なくなかったことから、それらは転用材であったことが判明した。一方の増築された石橋には新材の灰石（溶結凝灰岩）が使われていた。

解体復旧工事の石工頭は通潤橋（上益城郡山都町）の復旧工事を担当した荒木大人氏（尾上建設）。熊本地震で崩落した取付付近の水路の石垣も復旧された。（広報部）

石橋合わせ

中村まさあき

コロナ禍により自宅で過ごす時間ができ、過去の会報を見返してみた。目にとまったのが33号（1989年8月発行）表紙の「河頭（こがしら）太鼓橋」（鹿児島市）だった。1848（嘉永元年）に甲突川に架設された単一アーチ橋



河頭太鼓橋＝鹿児島市、1998年撤去
日本のいしばし33号表紙より（撮影者不詳）

（左）橋



不老橋＝和歌山市 写真提供／加藤元昭

同じような形状の石橋を見た覚えがあったからだ。会報バックナンバーで確認したら、79号（2011年7月発行）1面に掲載された和歌山市の「不老橋」がそれだった。不老橋は河頭太鼓橋の3年後の1851年の架設で径間は14・7メートル。和歌山藩に招かれた岩永三

（右）橋



津奈木重盤岩眼鏡橋＝熊本県葦北郡津奈木町
写真提供／中村まさあき

伝えが記されているが、事実是不詳。3橋はそれぞれ輪石や壁石に使用された石材のサイズなどは異なるが、アーチの形状と壁石の積み方が似ている。津奈木重盤岩眼鏡橋は岩永三五郎が鹿児島藩領（現・薩摩川内市）で最後に架けた江之口橋（1849年8月架設）と同年の架設。自宅は八代郡野津手永（現・氷川町）だったので、施工

（左）橋

*1 河頭太鼓橋の径間は、1986年時点の現地説明文には16・4メートル、原口泉著「河頭太鼓橋の歴史的意義と岩永三五郎」（土木史研究 第17号）には15・8メートル、山口祐造著「石橋は生きている」（葦書房）には17・6メートルと紹介されている

*2 日本の石橋を守る会ホームページ「日本のめがね橋一覧（都道府県別）」より

の作）。両橋は架設に岩永三五郎が関わったとされる点が共通している。

さらにもう1橋、似ている石橋が思

い当たった。それが熊本県葦北郡津奈

木町の「津奈木重盤岩（つなぎちよう

はんがん）眼鏡橋」。架設年は河頭太鼓

橋の翌年の1849年で不老橋の2年

前、径間は16・53メートル*2。説明板には岩

永三五郎の弟の三平が架けたとの言い

を他の石工に任せていたと考えると場所も自宅へ戻る途中に当たり、架設に岩永三五郎が関わった可能性もある。

そっくりな石橋を関連付けると、言

い伝えの中にも同じ石工の名が登場す

る。日本古来の「貝合わせ」は二枚貝

の分けた貝殻を合わせる遊びだが、石

橋を貝殻に見立てると、ある石橋と対

をなす石橋が見つかるような気がする。



電子書籍で出版

石橋のアンソロジー

理事 中村まさあき（熊本県）

このほど初の著作となる「石橋のアンソロジー 虹のアーチを巡る旅1 石拱伝来（せつきょうでんらい）」を電子書籍で出版した。アーチ橋が雨上がりの空に架かる虹に似ていることに着想を得て、石造アーチ橋伝来の地、長崎市を巡り、17世紀後半の石橋架設ブームの背景に触れた。

Amazonの本の通販ストアで、「石橋のアンソロジー」と検索すればダウンロード（500円）できる。全編横書きで、スマートフォン、タブレット、パソコンの各表示サイズに合わせて1行の文字数が変わり、文字の大きさも変えられる。読むにはKindleアプリ（無料）または専用端末が必要。Amazonストアの「カスタマーレビュー」に読後の感想などをお寄せいただけるとありがたい。



石橋のアンソロジー
虹のアーチを巡る旅1 石拱伝来
中村 仁彰著

Amazon Kindleストアにて500円（税込み）
KindleアプリはApp Store（iOS）、
Google Play（Android）から無料で
ダウンロードできる

笠松橋

久木野の里(熊本県八代市東陽町)を流れる河俣川に架かる「笠松橋」で思い出すのは、40年以上も昔のこと。橋の壁面に生えたツバキが1輪だけ赤い花を咲かせていた。毎年3月ごろになると今年も咲いているかなと期待して、自宅から30^分も離れたその橋を訪れたものだった。

橋の壁面は河原に転がる丸い野面石(のづらいし)を使って積み上げられていて、切石積みにはない野趣に富んだ魅力が感じられた。久木野の里はシヨウガの生産が盛んで10段以上の段々畑もある。集落の民家や細道の脇、段々畑の石垣にも丸い石が積みまれている。

笠松橋は橋本勘五郎が架けたといわれているが、実はいつ、誰が架けたのか分かっていない。輪石をよく見ると大正時代の石橋に似たところがある。右岸側の輪石に接する壁石の接合線が輪石まで縦に真っ直ぐ並んでいるところがあって、橋本勘五郎が石工頭ならそんな工事はしないだろうと考えるのだが…。

野面石を積んだ石垣は、織田信長が穴太(あのと)の石工衆に命じて築いた安

土城の石垣が有名だが、久木野の里にはひと昔前までは野面石を積む技術を持った人がいたように思う。橋本勘五郎の子孫の橋本脩成さん(故人)も、東陽石匠館(東陽町北)近くの田んぼの石垣を積んだと言われた。

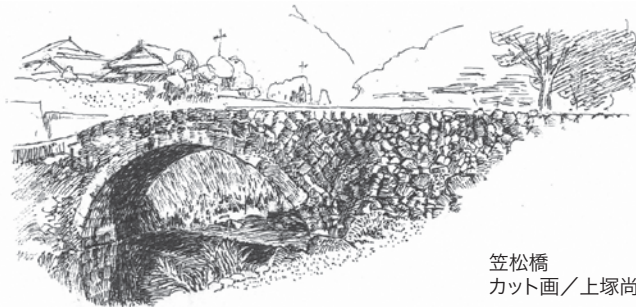
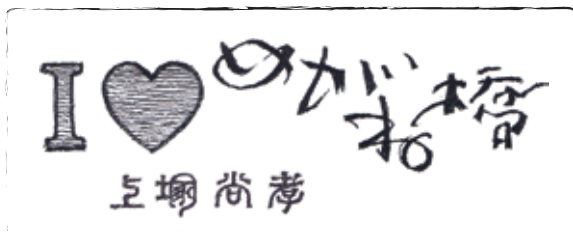
以前、ある人から「野面七面」という言葉を教わった

ことがある。野面石は転がしながら最も安定して座る位置を見極めてから据えるのだと。穴太衆の石垣積みのはなく、身近なところにも今も残っているような気がする。

そうを考えると、笠松橋の架設年代は古いようにも思えるし、それほど古くないのかもしれない。東陽町のめがね橋は21基現存するけれど、架設年が明確なのは1929(昭和4)年

架設の「谷川橋」(河俣川)のみ。谷川橋は差野(さしの)の田上甚太郎が石工頭を務めたが、完成前年に逝去したので副頭の河野賢三が完成させた。

東陽町に現存する他の橋では、鍛冶屋谷上橋、同中橋、同下橋の3基が種山石工の祖、林七が架けたとの言い伝えがあ



笠松橋
カット画/土塚尚孝

るが、確証はない。熊本藩の住民評価・褒賞記録「町在」(永青文庫所蔵)に河俣の4基が嘉永年間に架設された記録が残るが、その4基が現存するどの橋に当たるのが不明確。

そのように架設年や石工に関する記録が正確ではないので、教育委員会や文化財保護委員会も現地の説明板への表記に困っている。やむを得ず「伝」として残っているのは窮余の策であることを付記しておく。

(2021年3月30日)

差野の石工・田上甚太郎

差野の石工・田上甚太郎は1874(明治7)年12月11日、八太郎の長男として生まれた。差野は八代市東陽石匠館から国道443号を東へ1^{キロ}ほど先の地区で、田上甚太郎は八代市泉町の「か志ろつ橋」や高原(たこうら)橋、現存していないが宇城市小川町の「大五橋」や「山之神橋」、「大十橋」を架けた。

1969(昭和44)年のこと、東陽村西

原(現・八代市東陽町)に住む本川健吾さん(当時78歳)に会って、河俣川に架かる谷川橋の架設者について聞いたことがあった。太いきセルをくわえた健吾さんは、「あらあ、差野の甚太が造ったつたい」と石工の名を呼び捨てで答えられた。あぜんとしたが、続けて架設の時期について尋ねると、「わしが、まあだ青年のころだけん50年ばかり昔たい。初めに下橋(支保工)ば架けち、こらあ大工の仕事たい。その後、石工たちが両岸かる巻き石(輪石)ば順に積んでいくとたい」と言われた。

幸運にも架設途中の谷川橋の写真が現存する。アーチ中央のやや高い位置に、当時の久木野村議員で区長を務めた右田安兵衛氏が写っている。橋の完成は1929(昭和4)年なので、撮影時期はそれ以前になる。(2021年3月20日)



谷川橋 カット画/土塚尚孝



通算100号で休刊 記念号 原稿大募集!

1981年1月に創刊された本会の会報「日本のいしばし」は来年3月発行予定の次号で通算100号となります。これまでの会の歩みとともにあつた会報ですが、「コロナ禍」の影響で情報社会の進展が加速し、従来からの会報の在り方は転換期を迎えております。そこで昨今の時代の大きな変化を踏まえ、印刷物としての会報は節目の100号を最後に休刊とさせていただくことになりました。

そこで次号を記念号と位置づけ、増ページして、会員の石橋に関連する幅広い活動や思いを紹介したいと考えております。例えば、次のようなテーマで原稿や写真、絵画作品などをお寄せいただければと思います。

- ▽思い入れ深い石橋
 - ▽広く知ってほしい石橋
 - ▽石橋や石工などに関する通説の検証
 - ▽石橋構築・修復の技術継承活動
 - ▽石橋を生かした地域振興への取り組み
 - ▽石橋への思いを表した個人的活動
- 現在、本会のホームページでは78号第2版以降の会報バックナンバーが閲覧可能です。が、これに100号までを加えてアーカイブ(長期保存)とする予定です。
- 記念号では会員の多様な思いや活動をまとめたいと思います。これまで発表を控えてこられた会員の方にもぜひ現在の形式では最後となる会報にご寄稿をお願いいたします。(中村まさあき)

締め日 2022年1月10日
宛先 会報編集者 中村まさあき
メール koho@ishibashi-mamorukai.jp
〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
郵便 通潤橋史料館内事務局

日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報99号(通算) 2021(令和3)年9月16日発行

代表者 会長 上塚 尚孝
編集責任者 中村 まさあき
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>

第42回大会も中止に

事務局長 軸丸英頭

新型コロナウイルスのまん延により、本年5月に熊本県八代市で開催する予定だった第42回大会を中止しました。2年連続で大会が中止となり、当会の活動は大きく制約を受けています。

昨年度の決算は、総予算58万円余り(繰越金約23万円)に対し、支出は会報発行費やホームページ維持費、通信費等約20万円でした。差し引き約38万円を本年度への繰り越しとしました。会員の死亡や退会もありましたが、その一方で新規入会者を迎えて世代交代が進み、本年

4月時点で個人会員163人、団体会員3団体となり、会員総数では微増の状況です。

理事は5人が勇退。本年度から新たに「八女上陽の『ひふみよ橋』を守る会」の久間一正氏(福岡県八女市)、「豊岡のめがね橋を守る会」の森川孝一氏(熊本県玉名市)が理事に加わりました。

双方向コミュニケーションへ

当会の会員は「石橋が大好き」という共通点を持ち、石橋を愛(め)で、歴史を探り、石橋構築・修復技術を磨き、石橋が残る地域の魅力を伝える人々により組織されています。そのため当会の最も

大事な役割は石橋に関する情報を蓄え、会員相互の交流を支えていくこととなります。これまで会報やホームページを通じて情報の整理や発信は、担当者の使命感に支えられ続けてきましたが、その一方で担当者の役割負担と会員相互の交流の在り方が課題となっていました。

そこで印刷物での会報発行は、来年3月発行予定の通算100号をもっていったん休止とし、今後は会員が「双方向」でコミュニケーションできる仕組みづくりを目指します。本年度はどのような方法が選択可能で適当かを模索する一年になります。皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

編集後記

2011年3月発行の79号から会報編集・制作担当を引き受けて10年余り、石橋に関する話題を伝えようと発行を続けてきました。コロナ禍は2年目を迎え、会報の編集に制約がある中、関係者のお力添えのおかげで99号までなんとか発行にこぎ着けました。

ただ今後を考えると、役割を担い続けることはやはり困難と思われます。会報の記事に興味を持ってご覧いただいている方には何卒ご容赦いただきたく存じます。

記念の100号には、できるだけ多くの会員から石橋への思いをお寄せいただきたいと思います。

(会報担当 中村まさあき)